

# 教員紹介

今回は、基幹研究院人文科学系助教の福本まあや先生をご紹介します。福本先生は、大学院では比較社会文化学専攻舞踊・表現行動学コース、学部では舞踊教育学コースにご所属です。

## 自分なりの大志を抱いて

### Q ご出身、ご経歴などについて教えてください。

北海道札幌市出身です。高校卒業後、お茶の水女子大学舞踊教育学科(当時)に進学。大学卒業後は9か月間、欧米各地でダンスの修行を続け、帰国後はアルバイトなどをしながらフリーで公演活動を開始しました。その後、お茶大の大学院に進学し、後期課程在学中に富山大学での職を得て単身赴任。今年の春からお茶大に教員として戻りました。

### Q 舞踊の世界に入られたきっかけは何ですか。

高校生の頃は獣医になりたいと思っていました。高校2年の夏に道東の獣医師の元で数日間、住み込み体験をさせていただいて、思い描いていた世界との違いに驚き愕然としました。かなり悩んだ末に自分の好きなことをしようと思い、子どもの頃から好きだったダンスを仕事にしたいと考えました。そこで親に、留学してダンサー修行をしたいと言いましたが、経済的な問題もあり反対されました。ただ国立大学に進学するのであれば応援するというので、お茶大に進学したのです。

### Q ご自身もダンスをなさるのですね。

はい。ダンスをするというか、ダンス漬けの人生です。フリーの振付家として活動を開



## Fukumoto Maya 福本 まあや



始した時は自分のダンスとは何かを探求し、劇場だけでなくギャラリーや野外で踊ることもしていました。ここ数年は、ダンスよりも、その基礎訓練に取り込まれているボディワークを研究対象としていたので、ダンスからこのまま離れるのかなと感じ始めていたのですが、お茶大に教員として戻ることになり第2のダンス人生開始という感じです。

### Q 現在の研究内容について教えてください。

ここ数年取り組んできたのは、日本と米国の4つのボディワークを比較して、そこにある身体の考え方や方法論の構造を整理して解説するような研究です。ボディワークというのは、身体を内側から感じる経験を通して、意識的に直そうとしても直すことのできない動きの癖を修正したり、身体の調整を図るワークの総称です。日本の野口整体や野口体操、操体法などがそれにあたり、西洋にもフェルデンクライス・メソッドなど様々にあります。ボディワークは欧米では舞踊教育の一領域を占めるほど注目されているのですが、日本では個人的に取り組む舞踊家はいるものの、研究者にはあまり知られていないという現状があります。

研究から何が分かってきたのかと言うと、短くまとめるのは難しいのですが、例えば、ボディワークによく見られる一見突飛な指導法にはそれぞれ理由があって、その突飛さは身体の見え方(三人称の知覚)と感じ方(一人称の知覚)の違いにあるということです。それゆえ、ボディワークはカルト集団のよ

うだといわれてしまうこともあります。これはとても危険な状態だと思います。私たちは身体の見え方と感じ方にあるギャップに十分気づいて、内側の感覚にアクセスする方法を学び共有してゆかないと、身体が心からすっかり別物になって、衝動が大きくなるまで気が付かず、どうにもコントロールを失ってしまうということになりかねません。

### Q 現在の研究に関心をもったきっかけは何ですか？

博士論文で取り組んだコンタクト・インプロヴィゼーションというダンスの即興の形式が、多くのボディワークを取り込んでいて、学部生時代に関心を持っていた山海塾という舞踏グループも野口体操を取り込んでいて、その共通性に関心を持ったというのがきっかけです。ダンスの実技経験がなければ、この研究を始めることはなかったとも思います。

### Q お茶大の印象、学生に向けてのメッセージをお願いします。

着任2か月なので、印象といっても限られたものになりますが、とにかく今のお茶大には、学生に多くの選択肢が用意されていると思います。ただ、その用意されている選択肢を賢く使いこなすには、明確な目的意識と一方で気持ちのゆとりが必要だろうと思います。狭い視野にならないように、自分なりの大志を抱いて学生生活を送ってほしいと思います。

文責：西川 朋美

(基幹研究院人文科学系准教授)